

書評

井川 修 著

臨床心臓構造学
不整脈診療に役立つ心臓解剖

東京医歯大附属病院不整脈センター長

平 尾 見 三

待望の本が出版された。井川教授の心臓解剖の講演会が開かれると、まず満席になり講演後の質疑応答も活発で時間が足りなくなる。それだけ人気がある。書評子も例外ではなく、臨床の見地から入って精緻を極めた心臓解剖学へ導く井川講演のファンの一人で、この本の登場を心待ちにしていた。多くの解剖図と解説文、それらを体系的に構築・解析する独自のシェーマが加えられて、このたび『臨床心臓構造学』という珍しいタイトル名の本書が上梓された。

目次を俯瞰すると通常の解剖学の教科書でないことがわかる。これまでの解剖書があくまでも解剖専門家の視点で書かれたことを思うと、不整脈臨床家としての視点で本書が書かれていることが斬新であり、嬉しい驚きでもある。不整脈が先にあり、それに関連した解剖学が展開される構成で、これは臨床医にとって大変ありがた

い。それぞれの項目を開くと、解剖学の本であるにもかかわらず、心腔内電位図や心臓の 3Dmapping 像・X 線造影写真・透視像がふんだんに取り入れられ、それに関連したマクロ解剖図が示される。この解剖図が素晴らしい。われわれが見たい、知りたいと思うものに回答すべく心臓に割が入られ、ある時は裏から光を当てた鮮明な写真が掲載されている。推察するに、著者は自分が日常不整脈診療において抱いた心臓解剖・構造上の疑問について、多くの病理解剖を積み重ねながら明【めい】晰【せき】な洞察力をもって一つ一つ粘り強く、かつ徹底的に研究を継続されたのだと思われる。本書はまさにそれらの集大成である。

1990 年初頭より本邦に導入されたカテーテルアブレーションは、症例数が漸増して今や 3 万人を超えている。特に、日本にも約 70 万人以上存在するといわれる

心房細動に対する肺静脈隔離術の有効性が知られて以来、この数年間はその実施件数が年間 30% 以上伸びている。それに伴い、アブレーション手技に不可欠な心臓画像の技術革新は目覚ましい。いまでは数十秒で心腔内の 3D 像が得られ、また先に撮影しておいた心臓 CT 像上に心臓各部位の電位高、伝導様式などが可視化できる。非常に有用な診断支援装置が使える時代になった。しかし、マッピングにより得られる心臓構造情報は解像度、大きなゆがみなどの補正などにやはり限界がある。症例ごとに足りない部分は補い、また修正を要することもでてくる。その作業においては臨床医の知識・経験・臨床センスが問われるが、その意味で本書は心臓構造学の習得に大いに役に立つ名著であると確信している。自分自身、手元において日々のアブレーション診療の道しるべとしたい。

不整脈診療にかかわる医師のみならず、循環器疾患診療に携わるすべての医療関係者、臨床心臓解剖学を学ぶ医学生にも自信を持ってお勧めできる一冊である。

〔B5 頁 184 2011 年 定価
12,600 円 (本体 12,000 円 + 税
5%) 医学書院刊〕